

# 地元流通、意外に簡単なやり方もありそう

文 編集部 写真 奥山淳志

山形県で飼料米といえば、(株)平田牧場が有名だ。1996年に全国に先駆けて、遊佐町の稲作農家が栽培した飼料米を豚に食わせたこの「こめ育ち豚」の取り組みは先進事例として多くのメディアで紹介されている。

だが、山形県が飼料米先進県たる理由は、それだけではない。

「今8割くらいは県内で使われているはずですよ」というのは県畜産課の上野宏樹さん。飼料米の作付け面積が2507haと過去最大だった2012年度は、約1900ha分の飼料米が県内の畜産農家で使われたそう。それも平田牧場のように大規模なところばかりではなく、数ha〜70ha分程度の小さな地元流通もたくさんあるという。

昨年度は政府備蓄米の生産が増えて、飼料米は1723haに減ってしまったが、本年度は3000haまで拡大する計画。それでも山形県は8割の県内消費は可能だと見込んでいるそう。

実際に飼料米の地元流通に取り組む地域をまわった。

## 地元流通の取り組み

自産自消の畜産農家から町や農協の取り組みまで多種多様。今回はこちらで確認できたもののみここに示した(カッコ内は飼料米の作付け面積で2012年度産の数字)。

★……地域内完結型流通  
生産、加工、消費を市町村または単一農協管内で行なう。自分の田んぼでつくって自分の家畜に与える場合も含む

★……県外飼料メーカーを介する流通  
生産、消費は同じ地域だが、加工を県外メーカーに委託

県によると地元流通の総数は、地域内完結型流通が13、県外の飼料メーカーに加工や配合を委託するものが12で計25。その他に野川ファームが独自で県産の飼料米を集荷し、自社製品として販売する



イラスト=河本徹朗

## 稲作農家と



## 畜産農家と町と

### みんなので育てる

### 「舞米豚」——山辺町

最初に向かったのは、町の特産品として「舞米豚」に力を入れている山辺町。もちろん、山辺町産の米を食べて育った豚だ。

### 「町の米を食べた豚づくり」にみんなが本気になった

「舞米豚は町の宝だな」と話すのは會田保兵衛さん（65歳）。「舞米豚」の取り組みをずっと引つ張ってきた稲作農家だ。

転作面積の割り当てが増えた2008年、會田さんは、特別な機械も作業もいらぬ「米で転作」を仲間に持ちかけた。それまでソバやダイズなどをつくっていたが、田んぼでは収量もあがらず、経費を引くと手元にあまりお金が残らなかった。当時の飼料米の助成金は10aあたり5万円ほど。仲間も「田んぼにはやっぱり米がよかる」と賛成してくれた。

役場に相談に行くと、飼料米をつくるには売り先が必要という話



會田保兵衛さん

だったが、「山辺には阿部トンさんがあるから大丈夫だと思った」。會田さんが「阿部トンさん」と愛称で呼ぶのは町内にある(株)山形ビッグファームのこと。社長の阿部秀顕さん（43歳）とは家も近所で消防団の仲間だったこともある。

町の担当者と一緒に「山辺の米食べた豚つくらねえか」と話を持ちかけると、阿部さんのほうも「保兵衛ちゃんに言われちゃ断れない」と、話にのってくれた。平田牧場などの先進事例が県内にあったこともあり、阿部さんも特に抵抗はなかったそうだ。

初年度は8戸4・7haで飼料米を栽培。配合飼料への配合割合は

5%で、3000頭に給与する計画でスタートした。初収穫を終えた11月、「山辺町飼料用米推進部会」（以下、部会）が発足。メンバーは、飼料米を生産する稲作農家とエサに使う養豚業者の(株)山形ビッグファーム、それに町、県、JAやまがた、飼料メーカーの(株)北日本くみあい飼料、食肉卸の(株)山形県食肉公社の7者。山辺産の米を食べた山辺の豚をつくっていくと関係者が覚悟を決めたのだ。

### 町単独で収量加算を導入

2010年には戸別所得補償（当時）もスタートし、飼料米に10aあたり8万円の補助金が出るようになって、生産は少しずつ増えていった。

「2011年産からですよ。部会で、舞米豚の生産頭数を6000頭に、配合割合も12%に増やそうということになったんです」と役場産業課の川口崇さん。そうなるまで20t強でよかったものが、一気に120t必要になる。飼料米をつくる農家の人数をもっと増やし、さらに増収もしてもらう必要が出てきた。

そこで町は単独で、収量によって飼料米の助成単価が変わる収量



舞米豚



山辺町の飼料米の圃場。品種は専用品種の「ふくひびき」（写真提供=山辺町役場）